

タイトル:平成 23(2011)年度 教育セミナー

日時:平成 23 年 9 月 17 日(土)~20 日(火)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「アルバニア系民族居住圏を中心とした南東欧・バルカン半島地域と宗教紛争の解決に向けたアプローチ——カトリック・東方正教・イスラーム」

金森 俊樹(早稲田大学大学院博士後期課程)

本セミナーを知った最初の契機は、所属大学の学外関係掲示板に掲示されていたポスターでした。そして、東京外国語大学の HP 上で詳細を確認し、参加させて頂いた次第です。

これまで、私は、学部在学中より、一貫して、東欧革命後のバルカン半島地域のアルバニア、コソヴォ、マケドニア北西部を中心としたアルバニア民族居住圏を調査・研究対象として参りました。具体的には、現地調査等も含めた調査で得られた成果を、主として国際政治学の分析枠組みに当てはめて検証することで諸々の論文等を書いてきました。

その過程で、冷戦終焉後、特に 1990 年代以降のアルバニア民族居住圏を含むバルカン半島地域における紛争の背景について考察することが、最大の関心事になって参りました。

そこで、突き当たったのは、冷戦終焉によるイデオロギー対立の終結に伴うアイデンティティ・ポリティクスの問題でした。馬場伸也先生の『アイデンティティの国際政治学』等に触発され、地域紛争の背景には、民族・エスニシティ、宗教等、アイデンティティ対立の問題が存在するという見解に至った訳です。

バルカン半島地域は、宗教的には、カトリック、東方正教、イスラームの 3 つの宗教の交叉する地域であり、冷戦構造終焉以降の同地の対立・紛争には、新たな地域構造の形成過程に宗教が絡んでいるという見解が少なからずありました。その一方で、鈴木董先生の『ナショナリズムとイスラームの共存』等にある様に、多文明・多宗教国家でありながら、平和にバルカン半島から中東までの地域を統治していたオスマン帝国の統治構造にバルカン半島地域の平和に向けた再発見があるのでは無いかという考察に至った次第です。

他方で、バルカン半島地域では、民族・エスニシティと密接に関係しており、重要なアイデンティティの拠り所である宗教の側面について、従来、十分な検証を行って参りませんでした。そこでセミナーに参加させて頂き、自分の博士論文の中で重要な位置を占める宗教に関して御専門の諸先生方から貴重な御意見、御指導を賜りたいと決意しました。

参加させて頂き、レジュメや発表文の作成、発表、御指摘やコメントを頂戴する過程で、自らの思考を整理したり深めたりすることで、大変、実りの多い成果を得ることが出来た充実した 4 日間のセミナーでした。

今後、本セミナーでの成果を活かして、博士論文の作成に努力を傾注することで、諸先生方への学恩に報いたいと考えております。

末筆ながら、貴重で示唆に富んだ御講義、御意見、そしてコメントを下さった全ての先生方及びセミナー開催で御世話様になりました事務局の千葉様へこの場を借りて、篤く御礼申し上げます。併せて、東

京外国語大学大学院 AA 研の御活動の今後益々の御発展を心から祈念します。